小学国語通信　2015年　秋号

ことばだより

●目次

巻頭随筆　科学を伝えることば……横山広美……2
国語
特集　マッピングを活用しよう
　マッピングの意義と方法……塚田泰彦……3
　マッピングを取り入れた実践例……鈴木美枝……6
実践レポート　アクティブ・ラーニングと国語の授業……澤田仁志……8
書写
　書写学習への環境づくり……大胡利一……12

教育出版

巻頭随筆

科学を伝えることば

横山広美
東京大学大学院准教授

ここでは、「科学とことば」について書いてみたい。

私は中学二年生のとき、科学をことばで伝える仕事を志した。当時の私は、この世界の成り立ちや自分の存在がどのように説明できるのかをぼんやりと疑問に思っていた。そんなときに科学雑誌『ニュートン』を読み、宇宙の成り立ちを説明する科学を知り、その魅力にとりつかれた。本や文章が好きだったので、新しく得た知識をノートにまとめ、科学を文章で伝えたいと思った。科学を伝える仕事を経て、現在は科学と社会のコミュニケーションを専門にしている。

科学をことばで伝えることは難しい。あたりまえのことではあるが、科学の内容は専門的だからだ。ではなぜ、専門的な内容をことばで伝えることは難しいのだろう？

これについて、私は二つの理由があると考える。一つは、専門的な内容は、知識の積み上げであるという事実だ。かの有名なニュートンが「巨人の肩に乗る」と表現したそうだが、科学者はそれまでの科学者が積み上げた知識の上に乗って初めて、さらなる地平を目ざすことができる。専門家どうしでは、そうした知識が共有されており、それを前提に議論をするが、これを短い言葉でまとめ伝えることは難しい。

もう一つの理由は、伝えたい科学の歴史を、聞き手に共有してもらう難しさだ。例えば、「水槽の水を汲んでくれば、その中になんの魚がいるかわかる！」という成果はわかりやすい。水族館の水槽に何十種類の魚がいても、その水の中にあるフンや体表のＤＮＡを調べてデーターベースと照合すれば、高い精度で水槽にいる魚の種類がわかるという。「環境ＤＮＡ」と呼ばれる新しい研究成果だ。しかし一方で、「ニュートリノという素粒子に質量があった！」という大発見は、何がどうすごいのかわかりにくい。そもそも「ニュートリノ」という素粒子がどういうものかがわからないという一つめの理由に加え、「質量があった」ということが何を意味するのか、歴史的な経緯がわからない。

ためしに解説してみる。物理学者は、宇宙の誕生から歴史までを統一的な理論で説明できると信じている。四十年ほど前に、宇宙の力の一部を統一する「標準模型」という理論ができた。しかし、四つある力の全てを統一するには、これを越える理論が必要だ。「ニュートリノ」という素粒子が質量をもつことは、この理論からは予想されておらず、統一理論を目ざすにあたり突破口になると考えられた。……やれやれ、難しい。あとは、優れた科学者であり解説者である専門家たちにまかせたいと思う。

願わくは、若い学生や科学者がこの二つの理由を克服して、自分なりに科学をことばで伝える術をもち、科学を伝えると同時に科学と社会の間で起こる問題点を広く議論するようになればと思う。

よこやま　ひろみ　専門は現代科学論・科学コミュニケーション分野。二〇〇四年東京理科大学にて博士（理学）。東京工業大学研究員、総合研究大学院大学上級研究員を経て現職。二〇〇七年科学ジャーナリスト賞受賞。Journal of Science communication(JCOM)のEditorial advisory boardメンバー。個人ホームページ（https://sites.google.com/site/hiromiyokoyama/）

国語

■特集■

マッピングを活用しよう

マッピングの意義と方法

筑波大学教授　塚田泰彦（つかだ やすひこ）

国語科を中心に広く言語教育の現代的課題を追究している。著書に『語彙力と読書』（東洋館出版社）や『読む技術』（創元社）などがある。

マッピングとは

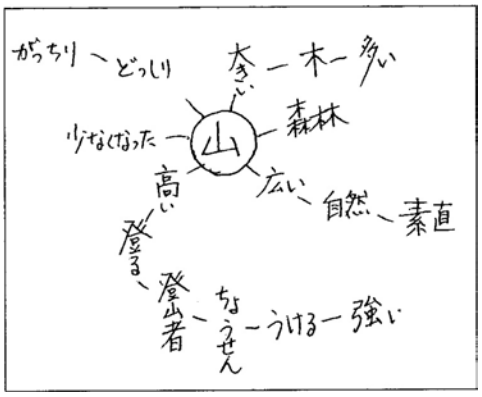


図1

どこかで、上の図1のような、「言葉」が「くもの巣状」に張り巡らされたメモ書きを見たことがあるのではないだろうか。

マッピングの基本となるかたちは、中心となる語句（トピック語）がまずあって、そこから次々に関連のある語句をくもの巣状に拡大していくものである。この図1は、「山」から「大きい」「森林」「広い」「高い」「どっしり」までを書いたあと、「木」を書いて、その後、「自然」「がっちり」「登る」「素直」と書き、さらにこの「登る」のところが書き継がれて長くなったものである。関連のあるものは近くに記入することになるため、ある程度までは「言葉のグループ」を意識しながらこの作業を行うことになる。

「マッピング」とは、このような作業を行うことによって言葉のつながりを図式化することを指し、その結果書かれたものを「マップ」という。

この方法は、これまでに類似の用語でいくつか提案されてきた。例えば、「概念地図法（コンセプト・マッピング）」「意味マップ法（セマンティック・マッピング）」「イメージ・マップ法（イメージ・マッピング）」「マインド・マップ法（マインド・マッピング）」などである。これらは、基本的な考え方や意義についてはほぼ共通しているので、ここでは、特定の名称を使わず、作業の方法については「マッピング」の用語を、結果として書かれたものは「マップ」という用語で説明していく。

なぜこの方法が提案されて普及したのか

国語科の役割は、学習者の言葉の知識を拡大し洗練し、すすんで活用しようとする意欲を高めることである。

「言葉の知識」と一くくりにしてしまうとわかりにくいが、その中核にあるものは「語彙知識」である。語彙知識とは日本語の語句の一定のまとまりのことであるが、一人一人がもっているこの知識は千差万別である。たくさんの言葉を知っている人もいれば、漢字を正しく使えないという人もいる。では、どのような語彙をどの程度習得していることが望

ましいのか。また、どうすると実際に役立つのか。マッピングは、この問いに答えようとして開発された、言葉の知識を整理し、活用するための方法である。

どのような言葉の知識が優れており、実際に有効なのかについては、次のように言いかえてみることができる。①どの語句（語彙）を、②いくつ、③どのように知っているとよいのか、である。学年別の漢字配当表は、この問いに対応したわかりやすい指針の一つで、教科書ではこれを丁寧に学習する工夫がしてある。しかし、この漢字の学習も含めて、これまでは、主として①と②を単なる「量」の問題として考えてきたのではないだろうか。③のどのように知っていると役に立つのかという「質」の問題については十分に考えてこなかったのである。

マッピングは、知識の様態を次のように捉えることで、言葉を覚えることや言葉を活用することを実質的にサポートしようとしている。

＊知識は階層的に組織されている。（知識というものは最上位の概念から最下位の概念までが、階層的な構造をなして形成されている。）

＊記憶に蓄えられている知識情報はネットワーク状になっている。（知識の蓄えられ方は全ての概念が結びついており、このネットワークが柔軟で可変的であるため、新しい情報がもたらされると、概念構造のそれ固有の位置に次々と組み込まれて、ネットワーク全体が変化する。）

＊トピック語（キーワード）が文章の理解や表現の活動をリードする。（中心となる語句が、理解活動や表現活動を先導するはたらきがある。）

このように、学習者の記憶に蓄えられている既存の知識をダイナミックに捉え、この頭の中にある知識の様態を「マップ」として、一度目に見えるかたちにして学習を仲介しようというのである。そうすることで、学習をいっそう促進し、その結果として、さらに学習者の知識のネットワークを洗練しようとしている。この場合のポイントは、学習者一人一人が記憶している言葉をマップに書き表すことで、すでに知っていることは何かを自覚させ、これを積極的に学習に役立てようとしている点である。

繰り返すが、大切なことは、「学習者の側に存在している言葉のネットワーク」を活用する点である。読んでいる教材文のキーワードを整理してマップに書くこともマッピングではあるが、その作業をしている学習者の頭の中に存在する言葉が、教材文の内容と関連づけて「学習」されなければ、その教材文を読む意味はない。そこで、読んだり書いたりするために行うマッピングには、その学習者がすでに記憶している言葉を一度呼び覚まし、それを個々の学習に生かす必要がある。これがマッピングという作業を行う意義である。

作成の手順とポイント

こうした意義を大切にして、マッピングは次の手順で行われる。

i　中心となる話題（トピック）を見つける、または教師が提示する。

ii　学習者が想起した（集めた）ことばを、カテゴリー化（書きかえ）して、位置関係を確認する。

iii　細目をつけ加えて、マップを拡充する。

iv　一度書いたマップを、学習過程に応じて、追加したり、書きかえたりする。この過程では、一人一人が書いたマップ（個人マップ）を交流して、グループやクラスで共通のマップ（グループマップ、クラスルームマップ）を作成することも有意義である。

v　一連の学習で複数のマップを作成した場合は、これを比べて、その変化を振り返り、学習の結果を自己評価する。

マップを書きかえることで思考を鍛える

マッピングでは、特に、連想を頼りに、できるだけ多くの語句を書き出そうとするため、無秩序なマップとなる傾向も見られる。このため、

適切な時点でカテゴリー化（書きかえ）を行うことが最も重要な過程になる。この点が、「思考を鋭くする」ための要諦であることも忘れてはならない。中心と周縁、大切なものと付随的なもの、それらの本来の関係性の把握などが思考のトレーニングとして常に意識化されることで、「ことばの知識」は活力を与えられる。

類推したり、比較したり、集めては取捨選択したりするといった思考活動を、より洗練されたものにする作業がマッピングである。実際、この方法が世界的に普及した理由も、知識の様態を具体的に想定して、生きた言語学習の補助手段として提案されたからであり、また特に、この作業が学習者自身の言葉を大切にして、力のない学習者にも、容易に興味をもって取り組むことができたからである。マッピングの長所は、書いたマップを学習に生かし、また学習した内容をマップに反映して追加・修正する、この反復を目に見えるかたちで行って、学んだことを自覚できる点にある。学習者の記憶から想起された「言葉のネットワーク」と学習する教材に使われている「言葉のネットワーク」を重ねたり、比べたり、修正したりして、この二つの種類のネットワークを豊かに連続的に拡大していくことが「学びの実態」だと考えるとよい。これは、学習者に自覚ある対応を促す一方で、教師にとっても学習者のマップを追跡・評価することで、学習の成果や授業計画の再検討を行う機会が提供されることになる。

どのような機会にマッピングを活用するか

筆者はマッピングを次の七つの側面で捉えており、その一つ一つの側面が国語科の学習を適宜支援すると考えている。

＊知識表現の方法としての側面
＊語彙学習の方法としての側面
＊読みの方法としての側面
＊作文の方法としての側面
＊評価の方法としての側面
＊楽しい個性的な表現としての側面
＊相互学習の方法としての側面

それぞれを具体的に単元に位置づけて説明する紙幅がないため、ここでは、作文の構想段階での活用例を一つあげておく。教育出版の三年下巻の教材『強く心にのこっていることを』には、書きたい話題として「ペットのカメ太のこと」を取り上げた次のようなマッピング（図2）と、それを活用して「いちばんつたえたい場面」を焦点化する方法が示されている。

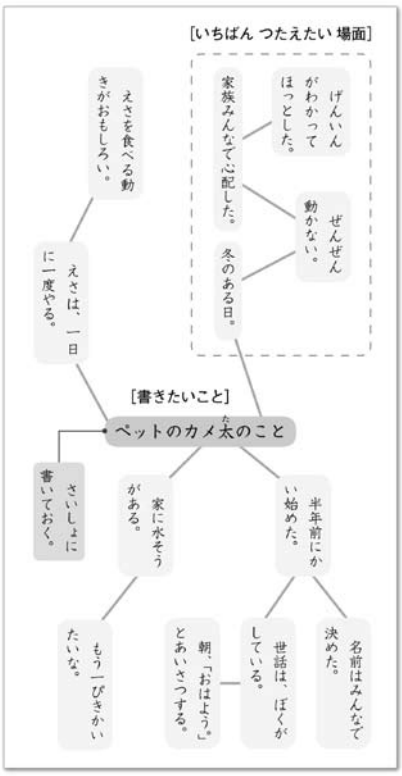


図2

マッピングは、基本的には、語句の単位で記述することが多いが、学習内容によっては、図2のように、文や節の単位で記述することも有効である。また、付箋などを使って、位置を適宜に移動させながら学習することも可能である。

こうした語句に限らず文字数の多いマッピングを見ていると、言葉のネットワークそれ自体が、一人一人の考える力であるように思えてくる。

◆主要参考文献◆
塚田泰彦編著『国語教室のマッピング』（教育出版）

マッピングを取り入れた実践例

発達段階に応じた実践を

千葉県我孫子市立
我孫子第二小学校教諭　鈴木（すずき） 美枝（みえ）

低学年の実践

低学年は、言葉を発想し、それらをマップに表現する練習段階といえる。発想した言葉をマッピングしたり、経験（読書も含む）で学んだ言葉をマッピングしたりすることで、自分の考えを言語化する力が向上する。この力は読んだり、書いたりする際に大いに役立つ。これを踏まえて物語を読み、マッピングする単元を試みた。帯単元とし、物語の教材を学習するたびに、定期的に取り組むことで、発想力や記述力が向上することをねらっている。

○二年生　単元名　読んで言葉を広げよう　**教材**　物語文

○教材の目標

・新しい言葉をマッピングするために、すすんで物語を聞いたり、読んだりする。（国語への関心・意欲・態度）

・物語の中の大事な言葉を書き抜くこと。【C(1)エ】

・経験から得た言葉と物語の内容を結びつけること。【C(1)オ】

・言葉には意味による語句のまとまりがあることに気づくこと。【伝国(1)イ(ウ)】

○学習計画

〔一次〕物語の挿絵を見て発想した言葉をマッピングする。マッピングの書き方を知る。

〔二次〕物語を読み、学習を通して新しく学んだ言葉をマッピングする。

〔三次〕学校図書館で物語を選書。読んで心に残った言葉をマッピングする。

○実践での留意点

児童自身が発想した言葉を大切にする。物語の中に出てくる言葉がたくさんマッピングされていることは、読み取りができているという評価につながる。友達との交流を通して、さらにマップに言葉をつけたす。その際には赤・青鉛筆で書くなど、自分の言葉とは視覚的に区別する。

中学年の実践

中学年になると、文章の要点を抜き出し、要約することが指導事項としてあげられる。その際にもマッピングは大いに役立つ。なぜなら、マッピングはキーワード（要点）を抜き出し、紙面に構成しながら表記する作業だからである。児童の関心・意欲を持続させるためにも、興味や感動を大切にしたい。中学年の読みの指導の中で、児童自身が気持ちを表す語彙を増やし、気持ちの変化を正しく読み、友達に伝えるために意欲的に表現することを目ざした。

○三年生　単元名　「どきどき感情カード」（自作）を作ろう

教材名　『わすれられないおくりもの』

○教材の目標

・登場人物の人柄や気持ちを表す言葉を本文から抜き出し、引用すること。【C(1)ウ】

・登場人物の気持ちの変化を読み取るためにいろいろな物語を読むこと。【C(1)カ】

・言葉は人柄や気持ちを表す役割があることを知り、すすんで人柄や気持ちを表す言葉を使って表現すること。【伝国(1)イ(オ)】

○学習計画　（全12時間）

〔一次：二時間〕「どきどき感情カード」を書くことを知る。本の選定の仕

方について知る。学習の見通しをもち、気持ちを表す言葉をマッピングする。

〔二次：七時間〕全文を読み、初発の感想を書く。場面分けをしたり、わからない語句を調べたりする。物語の設定について確認し、『わすれられないおくりもの』の設定を明確にする。登場人物のはじめの気持ちとあとの気持ちを想像し、比較する。登場人物の気持ちが変化した理由を考え、題名や場面をもとに整理する。学習後の感想を書く。

〔三次：三時間〕登場人物の気持ちの変化がわかる物語の本を読む。読んだ本の中から、自分が選んだ作品の登場人物の気持ちの変化がわかるような言葉を抜き出して「どきどき感情カード」を作成する。簡単なブックトークを通して自分が作成した「どきどき感情カード」を友達に紹介し、互いのよいところを伝え合う。気持ちを表す言葉をマッピングする。

○実践での留意点

写真は、教室に年間を通して掲示した「気持ちマップ」。喜怒哀楽を中心にして意識化を図った。新しい物語を読むたびに言葉をつけたしていく。感想文を書く際や主人公の気持ちを想像する際に活用できる。

高学年の実践

高学年になると、少しずつ抽象的な言葉も理解でき、言葉で思考することができるようになる。全体を見通して文章を読んだり、読み手を意識して文章を構成しながら書いたりすることを目ざす。マッピングは思考を視覚化することができる。文章構成を考えたり、事実と意見を区別したりと、キーワードを分類・整理する思考ツールとして活用できる。

○六年生　単元名　推薦文を書こう

教材名　『森林のはたらきと健康』

○教材の目標

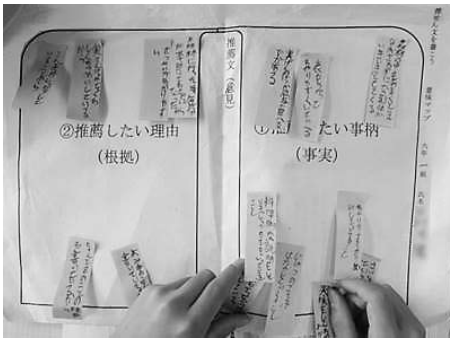
・森林のはたらきや筆者の説明の仕方、実験の手順などについて自分の考えを明確にしながら、読むこと。【C(1)ウ】

・推薦したいことを明確にして、意見と根拠を区別しながら、推薦文を書くこと。【B(1)ウ】

○学習計画　（全7時間）

〔一次：一時間〕推薦文を書くことを知り、学習の見通しをもち、計画を立てる。

〔二次：四時間〕推薦文の書き方を知る。『森林のはたらきと健康』を読み、感心・納得した部分を青い付箋に書き抜き、マップの右部分に貼る。左部分に、その根拠を本文から見つけて、赤い付箋に書いて貼る。内容面について納得したのか、筆者の説明の仕方について納得したのかなどの観点で、付箋を分類・整理する。分類・整理した中から、自分が推薦文を書くためのテーマを決め、マップの中心に書く。



〔三次：二時間〕推薦文を書く。書き終わったらグループで交流し、よい点を伝え合う。

○実践での留意点

マッピングする際には右部分に事実や意見、左部分に引用や根拠など、教師が見出しをつけることで、区別したり、思考したりする力を育成する。

展望

さまざまな場面でマッピングを活用することで効果が得られると考える。語彙を広げ、思考力を高める授業にマッピングは欠かせない。

実践レポート

アクティブ・ラーニングと国語の授業

北海道教育大学附属
函館小学校教諭
澤田（さわだ） 仁志（ひとし）

初等教育における アクティブ・ラーニング

本校では、「21世紀型の学力を身に付けていく子どもの育成」を目ざし、「アクティブ・ラーニング」という学習スタイルに注目して、日々実践に取り組んでいる。

本校でおさえている「21世紀型の学力」とは、例えば、「実社会で活用できる能力」「多様な情報から新しい考えを創造する能力」「創造的で批判的な考える力」「発展的でさまざまな表現力」などである。

それらを育成するために注目している「アクティブ・ラーニング」は、高等教育の場において、「学生参加型授業」「共同（協同）学習」「課題解決・探究学習」「能動的学習」など、扱う力点の違いによって、さまざまな解釈や呼ばれ方をしている。本校では、これらを「初等教育におけるアクティブ・ラーニング」とし、「子どもが自分自身の思考において活動する能動的な学び」と捉え、指導にあたっている。

「初等教育におけるアクティブ・ラーニング」の構成要素は、「①子どもが自主的・主体的に学んでいる」「②子どもが協同的に学んでいる」「③子どもが課題を解決しながら学んでいる」という三点が、同時に貫かれている学びであると考えている。

国語科とアクティブ・ラーニング

近年、国語科の学習指導として「単元を貫く言語活動」について、多くの学校で研究・実践が進められている。単元を貫く言語活動を位置づけた授業とは、子ども自らが目的を明確にして、課題解決の過程を構築しつつ、当該単元でつけたい国語の能力を確実に身につけられるように計画された授業である。これはまさに、アクティブ・ラーニングの構成要素の「①自主的・主体的な学び」「③課題解決的な学び」と重なる。また、国語科の学習において「自分の考えの交流」が重要であることから、「②協同的な学び」が必要不可欠であるともいえる。以上の点から、単元を貫く言語活動を設定した授業は、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業ということもできるのではないか。

自主的・主体的に課題解決する学び

子ども自らが主体的に学びを展開するためには、子どもが課題を解決していくことに対して、必要感や必然性、使命感や自己有用感などを抱くことが大切である。この学びへの思いを重視して進めることができた学びは、学習意欲が継続し、より定着していくと考えることができる。そこで本校では、「自主的・主体的に活動を進

める」「子どもが学びに意欲をもつ」ということを生み出すための必要感や必然性、使命感や自己有用感を生み出す支援として、教師による学びへの動機づけの重要性に着目した。

まずは、自主的・主体的学びを支える課題解決型の学習を、大きく「開始期」「展開期」「まとめ期」と区分した。更に「直接型の動機づけの支援」と「間接型の動機づけの支援」に分類し配置した。そして、これらによって分類された六つの支援を、それぞれどのように関係づけていくことがよいのかを検証してきた。

私たちが考えた「直接型の動機づけの支援」とは、教師が子どもに向けてじかに発信するようなはたらきかけのことであり、柔軟ですばやい反応が可能な支援である。また、「間接型の動機づけの支援」とは、教師が子どもの主体的な活動を促す環境をつくるために行うはたらきかけのことであり、時間的・空間的な調整をする支援である。

このように、分類し、教師による動機づけの支援を構造化して授業に生かすことで、さまざまな手段において子どもを過不足なく動機づけていくことができると考えた。

動機づけの支援例（開始期）

開始期における「直接型の動機づけの支援」として、「発問を工夫する支援」が考えられる。

具体的な授業として、一年下巻『お手がみ』では、かえるくんの「ぼく、もういえへかえらなくっちゃ、がまくん。しなくちゃいけないことがあるんだ。」という言葉に着目して学びを行っていく際に、今までは「どうしてかえるくんは、このように言ったのでしょう。」や「しなくちゃいけないことってなんだろう？」「この言葉を言ったかえるくんの気持ちを想像しよう。」などの発問をしてきた。どの発問も、子どもにとって教科書の言葉に着目しながら学びを進めていくことのできる発問だといえる。しかし、ここでこれらの発問を更に工夫し、「こんなに困っているがまくんを見捨てて帰るとは、なんてひどいんだろう。」と発問してみた。この発問は、子どもにとって予期せぬ方向からの言葉がけであり、多くの子どもが既に知っている物語の展開とは、逆の問いかけである。この発問によって子どもは、自分が知っている物語の正しい展開を伝えたいという思いから、すすんで教師に説明し始める。「先生、違うよ。このあとにかえるくんは、がまくんにお手紙を書いてあげるんだよ。」や「（教科書を示しながら）先生、ここに、このあとかえるくんが何をしたか書いてあるよ。」「かえるくんは優しいから、がまくんのためにうそをついたんだよ。」など、意欲的に発言を繰り返すことになった。

このように発問を工夫することで、子どもは必要感や使命感から、自主的・主体的に学んでいった。

実際の指導

『大造じいさんとがん』（五年上巻）

本実践においては、単元全体を通して、展開期において、子どもが自主的・主体的に学び続けることができるような学習場面（言語活動）の保障をした。また、その学習活動自体を協同的に進めなければならないような設定（間接型）をすることで、子どもは友達と協力しながら、意欲を持続させて学び続けることになった。

教材の目標

○作品を読んで考えたことやその作品の魅力を読書ボードに表すために、作品中の優れた叙述を人物設定や表現上の特徴、中心人物の心情などに着目しながら読むこと。【C(1)エ】

○作品の優れた叙述を読み、考えたことをコンテストで交流することを通して、作品について考えたことや作品の魅力について、自分の考えを広げたり深めたりすること。【C(1)オ】

単元を貫く言語活動の設定

実践にあたり、単元を貫く言語活動として、お気に入りの作品を選んだ子どもどうしが三～四人のグループを作り、印象的な場面や登場人物、本の魅力を一枚の画用紙に表して紹介し合う「読書ボードコンテスト」を位置づけた。

作成する読書ボードには、「印象的な言葉の引用」「それについてグループで話し合ったこと」「話し合って考えたキャッチフレーズ」の三点を書く。「印象的な言葉の引用」では、登場人物の心情を表している言葉や、美しい情景を表している言葉などを話し合いながら選定していくことになるため、「登場人物の心情や情景描写など、優れた叙述について自分の考えをまとめる力」が身につく。また、互いの話し合いの様子をボードに表したり、友達とキャッチフレーズを考えたりすることによって、「自分の考えを広げたり、深めたりする力」を身につけることができる。この言語活動は、子どもが見通しをもちやすく（①自主的・主体的な学び）、必然的に友達とともに（②協同的な学び）課題解決していく学び（アクティブ・ラーニング）になる。

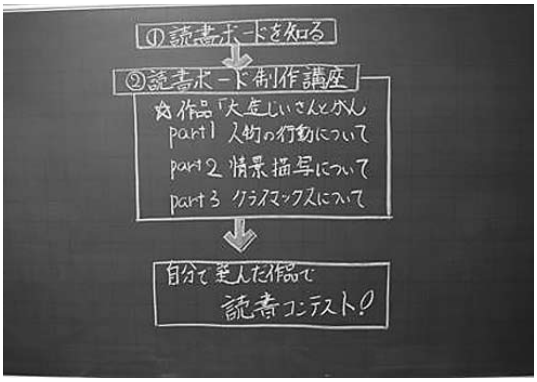
学習計画（全12時間）

一次	1時	『大造じいさんとがん』を読み、感想交流する。
	2時	読書会・読書ボードと出会い、興味をもつとともに、学習の見通しをもつ。
二次	3時	『大造じいさんとがん』で読書ボードを作ることを確認する。
	4・5時	読書ボード制作講座①「登場人物の行動や人物設定に注目！」
	6・7時	読書ボード制作講座②「情景描写などの表現に注目！」
	8時	読書ボード制作講座③「クライマックスの場面に注目！」
	9時	ここまでに作成した読書ボードで交流し、読書ボードを審査したり、賞をつけ合ったりする読書会を行う。
三次	10・11時	グループごとに選んだ作品を読み、交流したことを読書ボードにまとめる。
	12時	コンテストを開く。

展開期・間接型：子どもの活動場面の保障・協同的な学びの設定

この単元は、第一次で見通しをもち、第二次で教科書の教材を使って、第三次の練習を行い、そして最後に読書コンテストを行う構成となっている。

第二次は、『大造じいさんとがん』を扱いな



がら読書ボード作りの練習をしていく「読書ボード制作講座」である。『大造じいさんとがん』を読みながら読書ボードを作成するために、本文を引用したり、話し合ったりして、それらを統合するキャッチコピーを考える、という活動を、教師が与えた視点をもとに繰り返し行う。このことにより、グループで本文を読む必要性が出て、子どもはより主体的・協同的に学んでいく。

第三次では、お気に入りの作品を選んだ友達どうしでボードを作成する。第二次での経験を生かし、教師の説明がなくても、主体的・協同的にボードを作成し、互いのボードを三つの視点に照らし合わせて審査し合う姿が見られた。

改めて実感するのは、単元を貫く言語活動を位置づけた学習指導は、子どもの自主的・主体的な課題解決を促し、友達の思ったことや考えたことを必要としたり、目的達成に向けて協同的に学んだりすることにつながるため、本校で取り組んでいるアクティブ・ラーニングという学習スタイルと合致するということである。

■ 展望

最後に、アクティブ・ラーニングを実践していくにあたり、言語活動（課題）の設定において留意していることを記す。

○主体的な学びを進められるように明確な動機づけができること

言語活動（課題）はシンプルで動機づけしやすいもの、かつ、活動自体がわかりやすく、成果物が完成したときに満足度の高いものがベストである。

○無理なく力を身につけることができること

子どもにとって、目的に向かって楽しく意欲的に取り組むことができる言語活動（課題）を設定したい。一方、教師は、あくまでその言語活動を通して子どもにつけたい力があることを忘れないようにする。

○協同的に学ぶ必要性をもたせること

言語活動の実現（課題解決）のために、仲間と一緒に学習することが必須となるような言語活動を考えていくと、「自分の考えの形成及び交流」に関する指導事項も無理なく身につけさせることができる。

書写学習への環境づくり

千葉県木更津市立八幡台小学校校長
大胡（だい） 利（とし） 一（かず）

一　はじめに

本校では、「知的好奇心をもち　心豊かにたくましく生きる児童を育成する」を学校教育目標に掲げ、「かしこい子・やさしい子・たくましい子」を育てるために、熱意と誠意をもって、創意工夫をこらしながら、日々の教育実践に取り組んでいる。書写学習に関しては、次の三点が本校の特色といえる。

①三年生の毛筆入門期をスムーズに行うための工夫をしている。

②三年生以上の書写学習を、専科等の教員がチーム「書写班」を組んで担当している。

③希望者を対象にした「書写教室」を実施している。

この①から③について、次項より具体的に紹介していく。

二　特色ある三つの実践について

①毛筆入門期の工夫

二年生の年度末に、毛筆書写のための用具購入を保護者にお願いし、「毛筆書写学習のガイダンス」を前倒しして実施している。

ほとんどの児童にとって、毛筆を使うことが初めての経験であるため、新しい用具を購入するこの時期に、水書用紙を準備し、「用具の準備・後片づけ・筆の持ち方・姿勢」などの学習を行う。二年生のこのガイダンスでは水を使用するが、三年生になったら、墨を使って学習することを予告しておく。そして翌年度の四月には、準備や後片づけの仕方を復習をしてから、硯に墨を入れ、半紙に線や文字を書いていく。このとき、墨の量について意識させることが、その後の後

毛筆入門期の学習の流れ

(分)	流れ	学習内容と活動	資料
5	気づく	1　本時の目標を知る。 ・正しく，整える。　・本時の学習内容を知る。	
5	わかる・基準確認	2　姿勢のとり方を基準に合わせる。 ・「ぺたぺた」「ぴん」「ぐう」「そっと」	・掛図「よい姿勢」
10		3　用具の準備をする。 ・机に新聞紙を敷く。 ・ふきん，硯，筆置き，筆，下敷き，文鎮を置く。	・新聞紙 ・手作りの掛図（用具の模型）
5		4　筆の部分の名前を覚えて，筆を持つ。 ・一本がけ　・二本がけ	・筆の図 ・二本がけ（実演）
10	わかる・練習	5　いろいろな線を書く。 ・「一」　・横線とジグザグ（折れ）　・縦線とジグザグ（折れ）	・水書用紙 ・水書黒板「一」全体像と穂先の動き，始筆の形
5		6　まとめ ・今日の学習を振り返る。　・よい姿勢を確認する。	
5	確かめる	7　後片づけ ・後片づけの仕方を知る。　・最初の書写用具セットに戻す。	・電子黒板「あとかたづけ」

片づけにも大きく影響する。初めは、五百円玉くらいの大きさになるように墨を入れるよう指導し、一単位時間で使う量を考えられるように声がけをしていく。

② チーム「書写班」

本校では、三年生以上の書写学習を、担任以外の教員（四人）が担当している。

基本的には、それぞれの教員が、年間計画に基づいて指導にあたっているが、校内で同一歩調で取り組むものなどを決め、指導法の改善に役立てている。

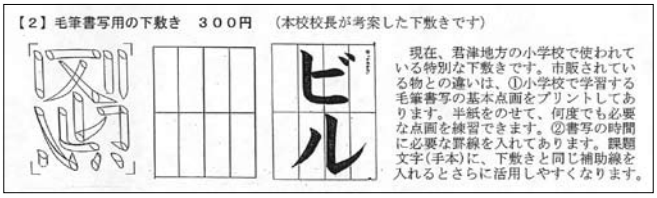
【チームで取り組んでいる活動や教材例】

○校内書き初め展覧会（学年別に席書大会として実施）

○一単位時間の学習の流れを確認

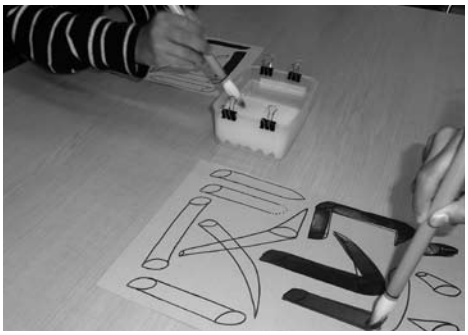
○特注の毛筆書写用下敷きの活用

○硬筆課題への取り組み（練習用紙・まとめ書き用の下敷きを作成）

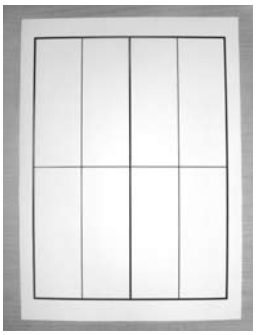

【2】毛筆書写用の下敷き　３００円　（本校校長が考案した下敷きです）

現在、君津地方の小学校で使われている特別な下敷きです。市販されている物との違いは、①小学校で学習する毛筆書写の基本点画をプリントしてあります。半紙をのせて、何度でも必要な点画を練習できます。②書写の時間に必要な罫線を入れてあります。課題文字(手本)に、下敷きと同じ補助線を入れるとさらに活用しやすくなります。

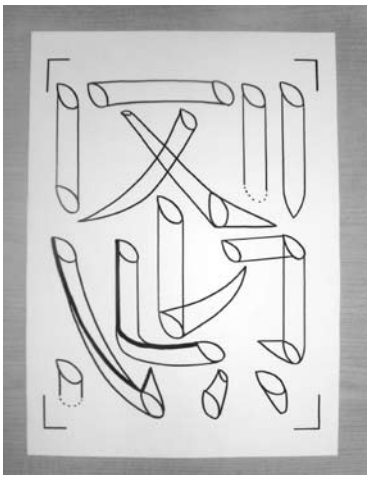
▲毛筆書写用下敷き販売のお知らせ



▲水で水書用紙に基本点画を練習している様子。

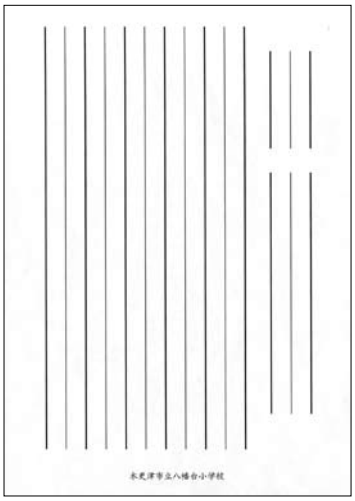


▲教科書の課題文字に，この下敷きと同じ補助線を入れて活用すると，配列や文字の大きさなどがつかみやすい。

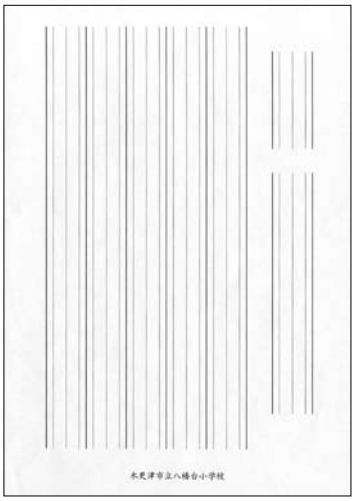


▲小学校で学習する毛筆書写の基本点画がプリントしてある。半紙をのせて必要な点画を練習する。

右の二点は，教科書（教育出版5年P.21）「配列を整えて書く」で使用したワークシート



▲まとめ書き用の下敷き



▲練習用紙

③ 希望者を対象にした「書写教室」

児童の書写に対する意欲に応えるとともに、広く書字活動への関心を高め、児童の文字感覚や書写技能の向上を図る一助となることを目ざして、昨年度より実施している。

（平成二十七年度の概要）

ア 期　間　四月十四日～三月十五日

イ 対　象　本校に在籍する参加希望者

ウ 活動時間　毎週・火曜日の昼休み

エ 活動場所　体育館（または特別教室）

オ 活動内容

①学校で提示した課題を家庭で書く。

②二枚を学校に提出する（随時）。

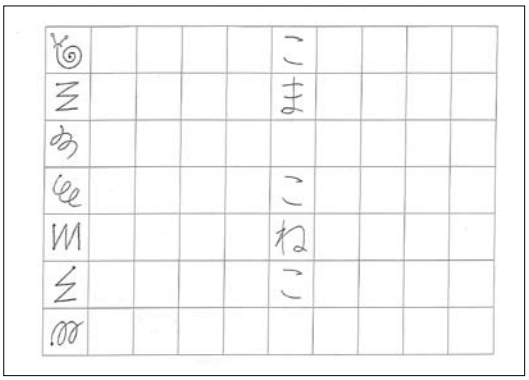
③一枚を添削し、児童に返す。

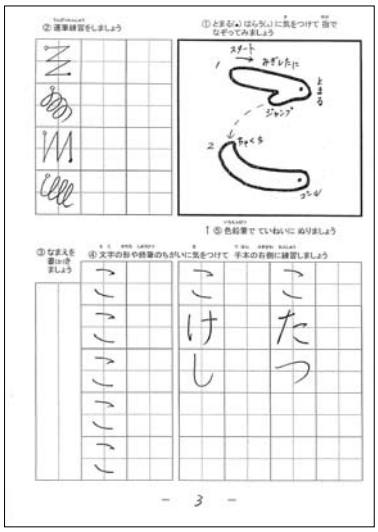
④右記の①から③を繰り返す。

●火曜日に「書写教室だより」を配付する。

●学年ごとに、硬筆課題や水書用紙を使って基本点画や氏名（小筆）の練習をする。

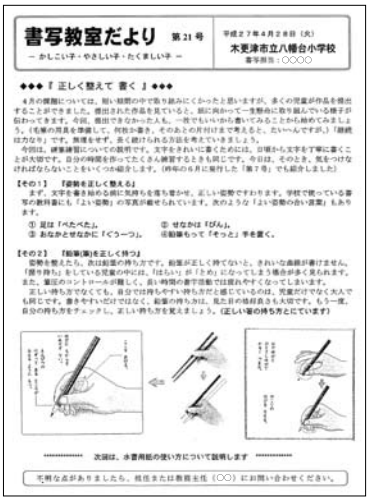
現在、「書写教室」への参加者は、全体で一三八名である。毎週のように提出している児童もいるが、月に一、二回という児童が多い。中には、以前から書塾に通っている児童もいるが、この「書写教室」に参加して、文字を書くことが楽しく、書写が好きになったという話も聞く。





▲▶１，２年生用の練習用紙。A4サイズで作成。

▲児童の成果物



▲「書写教室だより」

三　保護者との連携「親子書き初め教室」

本校の保護者と協力して、毛筆書写に不慣れな「一・二年生」のために、希望者を対象にした「親子書き初め教室」を公民館で開催した。

（平成二十六年度の概要）

冬休みに、毛筆による「書き初め」練習に取り組もうとする低学年児童のために、課題の見方と練習の仕方を学ぶ。

ア　日　時　十二月二十日（土）
　　十時から十一時三十分
イ　場　所　公民館・集会室
ウ　対象者　小学一・二年生の親子
　　（子どものみの参加は不可）
エ　参加費　無料
オ　定　員　二十組（四十名）
カ　持ち物　書道用具・手本・新聞紙（一日分）・筆記用具・レジャーシート・書き初め用紙・室内履き

平成２６年１１月吉日

１・２年生保護者 各位

親子書き初め教室
代表（○○）○○
（八幡台小学校保護者）

「親子書き初め教室」開催のご案内

初冬の候、皆様方には、ますますご清栄のこととお喜び申しあげます。
さて、１２月も近づき２学期も残りとなり、あとわずかとなりました。
１２月は、３年生以上の子供たちが、授業の中で書き初め用紙に今年の課題を書き始める時期です。今年は、八幡台小学校で「春等教室」が開催され、筆を使うことに慣れてきた子供たちが多いと思います。１・２年生の中にも、「取摩地方書き初め展覧会」に挑戦する子供たちも多いと聞きました。
そこで、大胡校長先生にご相談し、冬期春等にご協力を「１・２年生」のために、下記のとおり「親子書き初め教室」を開催する運びとなりました。各体みの取り組みを踏まえた練習の仕方を、校長先生に指導していただきます。奮ってご参加いただき、楽しく、充実した時間を過ごしていただければと思います。
なお、参加を希望される方は、申込用紙にご記入いただき、１２月５日（金）までに、教務主任の○○先生へ提出してください。

記

１．日　時　平成２６年１２月２０日（土）　１０：００～１１：３０　（受付９４５より）
２．場　所　八幡台公民館　集会室
３．対象者　小学１・２年生の親子（子供のみの参加はできません）
４．参加費　無　料
５．定　員　２０組（４０名）
６．持ち物　書道用具（墨汁、半本（取摩地方書き初め用）、新聞紙（一日分）、筆記用具、レジャーシート（一畳程度の広さ）、書き初め用紙（提供版）、室内履き
７．その他　○今回は、「取摩地方書き初め展覧会」の課題を練習します。
　　○参加者は各々のお手本の記入は、できませんのでご了承ください。
　　○その他の不明な点等のお問い合わせは、○○まで（TEL.55-5555）ご連絡ください。

キリトリ

平成２６年　月　日

「親子書き初め教室」参加申込書

参加者氏名（保護者）	（フリガナ）
〃（お子さん）	年　組
	（フリガナ）
連絡先〈電話番号〉	

申し込み締め切り日：１２月５日（金）　○○先生まで

▲「親子書き初め教室」の案内文書

四　おわりに

五月に発行した「学校だより（児童向け通信）」より、書写教室に関する記事を紹介して、結びとしたい。

日頃の小さな努力が大事

（前文略）今回は、昨年度から取り組み始めた『八幡台小学校・書写教室』についてです。今年度の学年別参加申し込み人数は、下の表（略）のとおりです。全体では、一三八名が参加し活動しています。

文字を書く学習は、それぞれの学級で週一時間の割合で行われている『書写』の授業が中心です。授業では、正しく整った文字（ひらがな・カタカナ・漢字）を書くために、どんな点に気をつけたらよいかを学習します。もちろん、それだけでは、正しく整った文字を書けるようにはなりません。

練習は、書写の授業以外でもできます。学校でも、家庭でも、文字を書く場面はたくさんあります。授業中のノート、連絡帳、宿題のプリントなどを書くときもそうです。日頃の小さな努力は、やがて大きな成果につながっていきます。

正しい姿勢、正しい鉛筆や筆の持ち方を身につけ、文字の形、大きさ、筆圧に注意して、ていねいに書こうとする気持ちが大切です。

昨年度、書写教室に参加していた皆さんの中には、自分の氏名が上手に書けるようになった人がたくさんいました。それは、文字をていねいに書こうという気持ちで、こつこつと練習したからです。上手になるチャンスは全員にあります。

（文責・大胡利一）

▲水書で氏名を練習する様子

まもなく締め切り!!

第13回

地球となかよし メッセージ 作品募集（2015年度）

「地球となかよし」という言葉から感じたり，考えたりしたことを，
写真（またはイラスト）にメッセージをつけて表現してください。

応募者全員に参加賞がもらえるよ!

応募資格	小学生・中学生（数名のグループ単位での応募も可）
応募期間	2015年7月1日 ～ 9月30日 詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧下さい。
作品テーマ	①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや，自然環境や生き物を守るための取り組み ②さまざまな人との出会いを通して，友好の輪を広げた体験，異文化交流，国際理解に関すること ③その他，「地球となかよし」という言葉から感じたり，考えたりしたこと

○主催／教育出版　○協賛／日本環境教育学会
○後援／環境省，日本環境協会，全国小中学校環境教育研究会，毎日新聞社，毎日小学生新聞
＊協賛・後援団体は昨年実績で，継続申請中です。

前回入選作品

川が…

近所の川はきれいですか？　それともきたないですか？　ぼくは，京都へ帰省した時に，七谷川という川へ行きました。そこは，水がとてもきれいでとうめいでした。サワガニやヤゴ，カワヨシノボリなど，きれいな川にしかいない生き物がいました。最近，トンボが少なくなってきていると聞いたことがあります。川が汚れて，ヤゴが育たないみたいです。ヤゴやカワヨシノボリ，サワガニが，住みやすいこのようなきれいな川を守りつづけたいです。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね
http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/

教育出版　「地球となかよし」事務局　TEL 03-3238-6862　FAX 03-3238-6887
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2－10

小学国語通信　ことばだより〔2015 年 秋号〕　2015年9月1日　発行

編　集：教育出版株式会社編集局　　発　行：教育出版株式会社　代表者：小林一光
印　刷：大日本印刷株式会社　　発行所：教育出版株式会社
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 2-10　　電話　03-3238-6864（お問い合わせ）
URL　http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は，科学技術の進展や国際化，情報化，高齢化などによって，今，大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で，人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには，人や自然を大切にしながら，共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは，この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め，社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社　〒060-0003 札幌市中央区北三条西 3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL：011-231-3445　FAX：011-231-3509

函館営業所　〒040-0011 函館市本町 6-7 函館第一生命ビルディング 3F
TEL：0138-51-0886　FAX：0138-31-0198

東北支社　〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL：022-227-0391　FAX：022-227-0395

中部支社　〒460-0011 名古屋市中区大須 4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL：052-262-0821　FAX：052-262-0825

関西支社　〒541-0056 大阪市中央区久太郎町 1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL：06-6261-9221　FAX：06-6261-9401

中国支社　〒730-0051 広島市中区大手町 3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F
TEL：082-249-6033　FAX：082-249-6040

四国支社　〒790-0004 松山市大街道 3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL：089-943-7193　FAX：089-943-7134

九州支社　〒812-0007 福岡市博多区東比恵 2-11-30 クレセント東福岡 E 室
TEL：092-433-5100　FAX：092-433-5140

沖縄営業所　〒901-0155 那覇市金城 3-8-9 一粒ビル 3F
TEL：098-859-1411　FAX：098-859-1411